

# 音節構造と聴覚印象

## ー 日本語とフィンランド語の対照研究 ー

横浜国立大学留学生センター 堀 普子美

### 1. はじめに

人ははじめて聞く言語の韻律に特別な印象を持つことがある。これはどのような過程を経ておこるのだろうか。印象とは特定の意味とともに得られるものなのか。母語や既知の言語の韻律から特定の意味が想起されることがあるのか。未知の言語の韻律も既知の言語の韻律的意味を通して聞くということがあるのか。つまり、韻律と意味がパターンとして知覚されることがあるのだろうか。

人は話し言葉の音の連続を音群にまとめて知覚し、規則正しい配列や繰り返される単位をリズムとして知覚している。リズムのメカニズムは、母音や子音などの語音の特徴というより、韻律要素(音の強さ・高さ・ポーズ・アクセント・イントネーション・母音調和など音素の関わりあいなど)により異なることが知られている。

従来、リズム類型論ではその違いを生み出す生成機構はタイミング制御であるとされ、その制御の単位がストレスかシラブルであるかによって、二つのリズム型が設定された。Dauer (1983)は、共通のリズム型を持つ言語の間に、音節構造やアクセントにおいても共通の特徴が観察されることを示唆した。つまり、リズムと音節構造に相関が認められるというのである。また、日本語研究においても、韻律構造と音韻配列パターンの相関が外来語の音節複合過程に観察されることが指摘されている(佐藤1993)。話し言葉のリズムと音節構造やアクセントなどの音韻構造との相関は今後の検討課題であり(窪園1995)、多くの言語から現象を集め実証していく必要がある。

一方、音韻論のみならず言語理論の多くは、英語圏で発達したため、言語理論の普遍的妥当性の検証にあたって、体系の異なる言語による傍証として日本語が役割を果たしたこともあった。日本語の対照研究においても、表層の構造や現象の異なる英語との対照研究で(大高1987, Poser1990, 窪園1995)日本語の構造が明らかにされることが多かった(注1)。

しかし、類似した特徴が認められる二つの非印欧語の対照研究で、その構造を明らかにしようとした研究は少ない。日本語とフィンランド語は音韻レベルで明らかに類似した特徴を持つ言語であることは堀(1993, 1994)で指摘した。フィンランド語のリズム特徴に関しては「愉快的なデタラメに聞こえることもある(中略)模範朗読を聞いて(中略)笑いこぼしてしまった」(稲垣1983)という記述がある。また、「発音しやすそう」「日本語に何か似ているけどこっけいに聞こえる」といった印象は、フィンランド語を初めて耳にする日本語話者から頻繁に聞く。

本稿では、知覚レベルのリズムと音節構造がどのように関わっているのかを、日本語とフィンランド語の音節構造の比較を通して考察する。

### 2. 音節構造とリズム

話し言葉のリズムは、伝統的なリズム類型論では二つの異なるメカニズムがあるとされている(Dauer *ibid*)。それは音節拍リズム(syllable-timed rhythm)と強勢拍リズム(stress-timed

rhythm) である。音節拍リズムとは各音節が等時的に繰り返されてリズムが形成されていく。強勢拍リズムとは強勢音節が等時的に繰り返されてリズムが形成されるというものである。タイミング制御の型によって分類されたリズム構造と他の音韻構造との対応は以下のように考えられている(注2)。

表 リズム構造と他の音韻構造との対応

	音節拍リズム	強勢拍リズム
音節構造	単純な子音構造	複雑な子音構造
アクセント	強さに依存しない	強さに依存する
無強勢音節	弱化する	弱化しない

日本語は音節拍リズムの下位範疇として考えられているモーラ拍リズムの言語である。一方、フィンランド語は奇数音節に強勢拍を持つ言語であるが、子音構造に関しては比較的単純なものであることが明らかにされている(堀1993)。上表を基準にすると日本語とフィンランド語は単純な子音構造を持つという点で音節拍リズムを持つ言語に見られる特徴を共有していることになる。

### 3. 音節量による音節分類と音節構造

比較的単純な子音構造を持つ言語の音節構造を観察するために本稿では音節量三元説を用いる。従来用いられてきた開音節・閉音節という区別では、音節末に子音があるかないかということが問題にされてきたが、音節量三元説音節では音節分類の基準であり内部構造をより詳しく観察するために、この音節分類の基準は、以下のとおりである。

- (1)各音節は内部構造により特定の重さを持つ。
- (2)頭子音の存在の有無に関わらず、音節核と子音の構造を問題にする。長母音は短母音の二倍の重さ、母音のあとの子音は短母音と同じ重さ、長母音を含む開音節は [単母音+子音] と同じ重さで、音節量の区分は以下のように三元的なものとなる。
  - a 軽音節： (C)V
  - b 重音節： (C)VV, (C)VC
  - c 超重音節： (C)VVC

さらに、音節量という概念をモーラという概念に発展させる解釈もある。音節の重さや長さを測る音節量を語の長さを測るモーラを単位として定義すれば、日本語では次のように分類される(注3)。

- a 軽音節： (1モーラ音節)      は(葉、齒) き(木、気)
- b 重音節： (2モーラ音節)      きょう(今日、凶)    かい(会、貝)
- c 超重音節：(3モーラ音節)    じいっと   ターン   おじさんっぽい

フィンランド語は日本語と同じく開音節が多く、促音や長音に相当する音節をはじめ、はつ音や二重母音の特殊拍に相当する音節を持つ(注4)。音節核と音節末の子音や母音の構造や特殊拍の配列パターンを詳しく観察するために、4つの特殊拍を別々に明記する。ここでは、窪園(1993a)

に従い、長母音をR、二重母音をJ、はつ音をN、促音をQと表す(注5)。

日本語の音節構造は次のようにあらわされる。

<1>日本語の音節構造

- a 軽音節: CV
- b 重音節: CVV (V-R, J) CVC (C-Q, N)
- c 超重音節: CVVC (VC-RN, RQ, JQ, JN)  
CVCC (CC-NQ)

一方、フィンランド語は三つの子音からなる子音群を持つが、その構造は複雑なものではなく(堀、前掲)、また、モーラが韻律単位として機能しているという指摘もある(Lehtonen 1970)。日本語との音節構造の比較のためには、音声の見地からフィンランド語の子音群の各子音の長さが証明され、モーラの数を変える必要がないのか否かにも明らかにされなければならない。本稿では音韻的レベルで比較することとし、フィンランド語のそれぞれの音節を音節量三元説で分類し、続いてその構造を観察する。

<2>フィンランド語の音節分類

- a 軽音節: Ja-pa-ni, aa-mu, a-se-ma
- b 重音節: puu, Suo-ma-lai-nen, Pek-ka,
- c 超重音節: Naan-ta-li, Riik-ka, kaup-pa, Soin-tu, sys-kuu, Pent-ti, Kort-ti, irs-tas

分類された音節の構造を<1>に従って表すと以下のようになる。

<3>フィンランド語の音節構造

- a 軽音節: CV
- b 重音節: CVV (V-R, J) CVC (C-Q, N, C\*)
- c 超重音節: CVVC (VC-RN, RQ, JQ, JN, RC\*)  
CVCC (CC-NQ, CQ\*, CC\*)  
(\*は日本語にない音節構造)

音節量三元説で分類された日本語とフィンランド語の音節の内部構造の比較から、以下のことが分かる。

音韻配列パターンは日本語よりフィンランド語のほうが多い。さらに、日本語になく、フィンランド語に存在する音節構造はあるが、フィンランド語になく日本語に存在する音節はない。具体的には、重音節ではCVC、超重音節ではCVCQ、CVRC、CVCCである。しかし、CVC、CVRC、CVCQ、CVCCにおいては、音節末の子音音素(CVC、CVRC、CVCCのC)は/s/と/t/、連続する子音のはじめの子音音素(CVCQ、CVCCのC)は/r/と/l/であり(堀 1993、1995)、音韻配列パターンはフィンランド語のほうが多いが、音素は限られていることが分かる。

#### 4. 超重音節が現れる環境

次に、超重音節を持つ語はどんな種類の語であるか具体的に単語をあげ、その特徴を探る。

##### <4>日本語の超重音節を持つ単語

〈音節構造〉

〈単語〉

CVRN: ガーン ズキーン ジーン

CVRQ: すうつと きゅうつと じいつと さあつと

CVJN: イオン デザイン コイン サイン 下院

CVJQ: おもいつきり げんだいっこ

CVNQ: ロンドンっこ おじさんっぽい

連続する二つの特殊モーラを持つ超重音節は日本語では名詞や形容詞や動詞の基本型には現れず、オノマトベや形容詞の強調形や複合語や外来語に現れると言える。

##### <5>フィンランド語の超重音節を持つ単語

〈音節構造〉

〈単語(意味)〉

CVRN: Naan-tali (地名) Rap-peen-ran-ta (地名)

Ha-meen-lin-na (地名)

CVRQ: Riik-ka (人名) Iit-ta-la (社名) Aar-re (人名)

Jaak-ko (人名) liik-keel-la (機械で)

CVNQ: Mink-ki-nen (人名) Pent-ti (人名) kans-sa (いっしょに)

CVJQ: kaup-pa (商業) Heik-ki (人名) kaik-ki (すべて)

CVJN: noin (およそ) u-sein (しばしば) soin-tu (音)

\* CVRC: syys-kuu (9月) juus-to (チーズ)

\* CVCC: kurs-si (クラス) Korn-pi (人名) tulp-pa (爪)

\* CVCC: myrs-ky (嵐) kors-kea (傲慢な) irs-tas (自堕落な)

フィンランド語では超重音節は名詞や形容詞の活用形をはじめ、固有名詞にも現れる。つまり、特殊モーラが連続する超重音節はフィンランド語では基礎語彙にも生起するが、日本語では特殊な語においてのみ現れると言える。

#### 5. まとめ

日本語話者が初めてフィンランド語を聞いたときに、フィンランド語が「デタラメ」または「こっけい」と知覚される根拠を音節構造の中に求めた。日本語話者が日本語の中で形容詞の強調形やオノマトベなどにおいてのみ多くあらわれる音韻配列パターンを、別の言語の中で聞いたとき、日本語における意味を連想したのではないかということが推測できる。言い換えれば、はじめてフィンランド語を聞く日本語話者が前述のような聴覚印象を持つのであるなら、韻律レベルにおいて母語の韻律がもつ意味、すなわち特定の語や語種が想起できるほど、音節構造が類似しているとも言えるのである。

本稿では、音節構造がリズムの生成過程で関与しているだけでなく、知覚のレベルにおいてもリズムと音節構造が表裏一体となっていることを証明する現象を取り上げた。

注

- (注1) 窪園 (1995)は、英語と日本語は表層において異なるが、一見別個に存在するかに見える音韻現象も同じ音韻原理によって支配されていることを証明し、体系の異なる英語と共通した原理が日本語においても働いていることを指摘する。
- (注2) 一つの言語が二つの特徴を持つことはありえないのか、またリズム特徴は二項対立する概念なのかという疑問には本稿では立ち入らない。この表は窪園 (1993b)を参照した。
- (注3) これに関し、日本語に3モーラ連続があるという説 (窪園 1993a)と、日本語では3モーラの連続は回避される傾向があり、2モーラと1モーラに分けられるという説がある (窪園 1995)。
- (注4) 四つの特殊音素はそれぞれ自立度においては異なる振る舞いを見せる。自立度の点から、長母音>はつ音>促音>二重母音という階層が観察されるという (窪園1993a)。
- (注5) フィンランド語の二重音音は有声音も含むので、Qで本来あらわすところの無音状態だけではない。尚、フィンランド語には特殊音素をNやQなどであらわす習慣はないが比較における便宜上この表記法を用いた。

参考文献

- (1) 別宮貞徳 (1977)『日本語のリズム』講談社
- (2) Dauer, R.M. (1983) "Stress-timing and Syllable-timing reanalyzed," *Journal of Phonetics* 11
- (3) 堀誉子美 (1993)「フィンランド語の音節と日本語の音節」『第六回日本語教育連絡会議報告書』日本語教育連絡会議事務局
- (4) 同上 (1994)「フィンランド語話者にとっての日本語の音韻体系」『横浜国立大学留学生センター紀要』第一号
- (5) 同上 (1995)「音節量による日本語とフィンランド語の韻律比較」『横浜国立大学留学生センター紀要』第二号
- (6) 鹿島央 (1992)「日本語のリズム単位とその型について」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
- (7) 稲垣美晴 (1981)『フィンランド語は猫の言葉』文化出版局
- (8) 小泉保 (1983)『フィンランド語文法読本』大学書林
- (9) 園晴夫 (1993a)「日本語の音節量」『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究 (2) 文部省重点領域研究日本語音声E10班研究成果報告書』
- (10) 窪園晴夫 (1993b)「リズムから見た言語類型論」『言語』22-11大修館書店
- (11) 同上 (1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版
- (12) KARLSSON, F. (1983) Finnish Grammar Werner Soderstrom Osakeyhtio
- (13) LEHTONEN, Jaakko (1970) Aspect of quantity of standard Finnish Studia Philologica Jyvaskyla
- (14) 大高博美 (1987)「日本語の音節構造とリズム」『言語』16-6 大修館書店
- (15) Poser, W. (1990) "Evidense of foot structure in Japanese," *Language* 66
- (16) 佐藤大和 (1993)「外来語を材料としたアクセントの検討」『日本語音声と日本語教育文部省重点領域研究日本語音声D1班研究成果報告書』